



TITLE:

<和文論考>『ねじまき鳥クロニクル』における日本への旋回 --交差する戦争と神秘体験--

AUTHOR(S):

奥田, 浩司

CITATION:

奥田, 浩司. <和文論考>『ねじまき鳥クロニクル』における日本への旋回 --交差する戦争と神秘体験--. MURAKAMI REVIEW 2019, 1: 17-35

ISSUE DATE:

2019-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/250133>

RIGHT:

『ねじまき鳥クロニクル』における日本への旋回
—交差する戦争と神秘体験—

奥田浩司
(愛知教育大学)

War and Spiritual Experience:
Turning to Japan in Haruki Murakami's *The Wind-Up Bird Chronicle*

Koji Okuda
(Aichi University of Education)

Abstract

Haruki Murakami wrote *The Wind-Up Bird Chronicle* in the United States during the Gulf War. The author claims to have become more interested in Japan after his stay in the United States. This paper analyzes the novel in the context of Murakami's experience in the United States. In this novel, Lieutenant Mamiya talks to Toru Okada, who lives in modern Tokyo, about his supernatural experience during World War II. Mamiya is able to sense supernatural objects but cannot clearly identify them because he is unable to extricate himself from a soldier's mentality. On the other hand, Toru is able to do what Mamiya could not do—use supernatural powers to fatally wound Noboru Wataya. This story reveals how the presence of the supernatural in today's Japanese society prevents a return to pre-war times and attempts to show connections with supernatural power across Asia.

1. はじめに

『ねじまき鳥クロニクル』は、第1部「泥棒かささぎ編」、第2部「予言する鳥編」が1994年に、第3部「鳥刺し男編」が1995年に、それぞれ新潮社から出版された。村上がこの長編小説を執筆したのは、アメリカ滞在中のことである。当時のアメリカは湾岸戦争の渦中にあり、村上によれば「準戦時体制」のアメリカ滞在は少なからざる影響をこの物語に与えたと言う。

物語では、満州国における戦争の歴史に焦点が当てられている。第1部では、主に「11 間宮中尉の登場」¹「12 間宮中尉の長い話・1」「13 間宮中尉の長い話・2」の3章を通し

¹ 正確には「間宮中尉の登場、温かい泥の中からやってきたもの、オーデコロン」

て、間宮中尉の口から戦争の記憶が語られる。初版で第1部の総頁数を確認すると308頁²になるが、その内ほぼ80頁が間宮中尉の話に当てられており、第1部の四分の一に相当する。それだけ第1部の中で、間宮中尉の話が重要な位置づけを与えられていることになるであろう。第2部でも間宮中尉の話は引き継がれていく。

第3部では間宮中尉のシベリア抑留体験が語られる。第3部が第1部や第2部とやや異なるのは、赤坂ナツメグや赤坂シナモンを通して満州国での出来事が語られるなど、満州国における戦争の記憶は様々な視点から描かれていることである。そのことにより、間宮中尉の話は求心力を失っているようにも見える。だが本稿では、間宮中尉の話は一貫してこの物語を支える重要な要素であると考え、間宮中尉の話を中心に考察を進めていく。

この物語で描き出される間宮中尉の戦争体験は、血生臭い暴力的な体験ではあるのだが、その一方で神秘的な体験でもある。間宮中尉の神秘体験は明らかに戦争からは乖離しており、そこに謎が潜んでいる。この謎について、『ねじまき鳥クロニクル』の第1部の巻末にあげられている参考文献を参照して考察を行う。その上で第3部において石原莞爾が引用されていることの意味について検討を加え、この物語の批評性を明らかにしていきたい。

2. 日本への旋回

2017年に新潮社から刊行された『騎士団長殺し』第2部の帯には、以下のように記されている。

1994-95年『ねじまき鳥クロニクル』

2002年『海辺のカフカ』

2009-10年『1Q84』

そして更に旋回する村上春樹の小説世界

この帯の記述にしたがえば、『ねじまき鳥クロニクル』から何かが始まり、村上の小説世界は「旋回」を続けていることになる。ここでは「旋回」の意味を「ターン」として捉えたい。このように「旋回」を理解すれば、この帯の記述は示唆に富んでいることがわかる。なぜなら、後に論じるように村上の創作意識は『ねじまき鳥クロニクル』を境にして大きく変容を遂げるからである。では、どこに向かって旋回したのであろうか。その鍵は、村上の滞米経験にあると考える。

先に述べたように、村上が『ねじまき鳥クロニクル』を書いたのは滞米中のことであった。これから滞米中の村上の創作意識について、エッセイ集『やがて哀しき外国語』³をもとに考察していく。このエッセイ集は、1994年に新潮社から出版されている。巻末には「『本』一九九二

² 参照したテキストは初版である。小説本文からの引用はすべて初版による。

³ 「『やがて哀しき外国語』のためのあとがき」(『やがて哀しき外国語』、新潮社、1994年。後に講談社文庫として出版される。)、以下引用に際しては、初版の単行本を用いた。

年八月号より一九九三年一月号掲載」とあり、初出誌と掲載月が記されている。村上は 1992 年の夏には『ねじまき鳥クロニクル』の第一稿を完成させており、エッセイを執筆する時間的な、或いは精神的な余裕ができたと推測される。このエッセイ集の「あとがき」で、村上は次のように述べている。

でもただひとつ真剣に真面目に言えることは、僕はアメリカに来てから日本という国について、あるいは日本語という言葉についてずいぶん真剣に、正面から向かい合って考えるようになったということである。⁴

村上は、滞米経験を契機として「日本」「日本語」に「真剣」に向き合うようになった言う。ただし、それは日本文化を礼賛することではない。村上は続けて次のように語る。

日本語という言葉が、だんだん自分にとっていとおしい、なくてはならないものになってきた。これはべつに日本回帰だとかそういうことではない。外国に行った西洋かぶれの人が、ころっと日本文化至上主義みたいになって帰ってくる例は多いけれど、僕が言っているのはそれとはまた別のことである。⁵

村上は「日本回帰」を否定する。「回帰」には元に戻るという意味があり、それは「日本文化至上主義」に繋がるという点で、村上は否定するのであろう。だが、村上が「日本」に「真剣に」「正面」から向き合う方向へと姿勢を変化させたのは確かであり、村上の滞米経験を考える上で「日本」との関わりは看過できない。

「日本」に「回帰」しないで「日本」に向き合うことは、村上の創作意識とどのように関わっているのでしょうか。この点については、日本文学の可能性に言及した次のような村上の発言が示唆的である。

(略) ある程度のブレイクスルーなら僕はできると思う。そしてそれを可能にすることによって、日本文学も自動的に活性化してくるはずだと信じている。日本語で小説を書きながらもう一度日本語を相対化すること、日本人でありながらももう一度日本人性を相対化すること——僕はそれがこれからの大事な作業になってくるのではないかと思っている。

村上は「日本人性」の「相対化」に、日本文学の可能性があるとする。しかし当然のことではあるが、日本人である限り、自然と化している日本的な思考や感性を「相対化」することは難しい。

⁴ 前掲『やがて哀しき外国語』

⁵ 前掲『やがて哀しき外国語』

可能性があるとするれば、他の文化圏によって差異化し、「日本人性」の特質を明らかにすることではないだろうか。後に議論するが、村上は西洋文化と接続させることで「相対化」しようとする。

これから村上の言う「日本人性」の「相対化」について考察を加えていきたい。そのため、エッセイ集刊行に関連するインタビュー記事「日米関係／アメリカについてずっと考えていたこと」⁶を参照する。

この記事の冒頭では、村上の現状について「三年前にアメリカのプリンストンに移り住み」「昨年の八月からボストンに移り、現在も次作の長編小説を執筆中」と紹介されている⁷。インタビューで、村上は「僕は三年間ずっと」「湾岸戦争」について考えてきたと言い、その理由について「自分という人間の位置や方向性が失われてしまいそうだったから」としている。村上にとって、「湾岸戦争」は言わば主体性にかかわる切実な問題であったことがわかる。

また村上は、「湾岸戦争を考えるというのは日本人にとっては（略）日本国憲法を考えるということになる」とする。そして、村上は「平和憲法」の存在によって多国籍軍に参加しなかったことについて、「国内的に通用したとしても、外に対しては通じない」という認識を示す。その一方で、村上は「僕は平和憲法で育った世代」であるとして「高度成長期」までは「誇りのようなもの」を持つことができたと述べる。その上で、村上は「平和憲法」について次のように言及する。

でも文章をなりわいとする人間として今この第九条の条文をあらためて文章的に読み直してみると、哀しいことだけれど、僕はもはやそこから美しさや気概というものをかつてほど強く感じとることができない。それを長い年月にわたって損なってきたのは、僕ら自身の中の誤魔化しであり偽善性ではなかったか。

村上は、「日本」には「平和憲法」を「損なってきた」「偽善性」があるとする。そして、村上は「なんらかの新しい自前の理念なりヴィジョンなりを、かなり覚悟を決めて掲げなくてはならない時期に来ている」と述べる。

ただしこの発言の趣旨は、村上が「誤解されると困るんだけど、僕は何も憲法を改正しろと主張しているわけではない」と述べているように、第九条の「改正」を求めるところにあるわけではない。逆に、村上は「平和憲法」の「美しさ」を損ない空文化してきた「日本」を問題化している。

村上がこのような問題意識を抱いていたことは、『ねじまき鳥クロニクル』の創作意識につい

⁶ 『週刊文春』、1994年3月17日

⁷ 村上は「いろいろと考えてみると、僕が『ねじまき鳥クロニクル』第3部を書き始めたのは、たぶん93年の末ごろだったのではないと思われる。（略）第3部の第一稿は1994年末に書き上げているから、おおよそ一年かけて第3部を書いたことになる」（「解題『ねじまき鳥クロニクル』2」、所収『村上春樹全作品1990～2000 ⑤』、講談社、2003年）

で考える上で注目される。インタビューで村上は、『ねじまき鳥クロニクル』について次のように言及している。

僕はこの小説をアメリカにいる三年間延々と引っ張って書きつづけているんです。そして小説というのは総合的な入れ物だから、僕が今ここにいてこうして考えていることはどんどんそこに結果的に入りこんでくると思うんです。

『ねじまき鳥クロニクル』には、「平和憲法」を損なってきた「日本」の「偽善性」と新たな理念の探求と言う、村上の問題意識が「入りこんで」いると考えてよいであろう。

村上は「日本人性」の「相対化」に文学的可能性を見ていたが、そこには日本の「偽善性」が含まれていると考えることができる。戦後の日本は「平和憲法」を掲げて新たな道を歩み始めたが、次第に「平和憲法」の精神は失われていく。村上は「日本人性」の「相対化」を通して、「平和憲法」の精神を損なう「日本人性」の問題を明るみに出そうとしている。

村上は米国から大きく弧を描いて「旋回」して、「日本」に向かおうとしているのではないだろうか。村上は「日本人性」の問題に焦点を当て、小説世界を「活性化」しようとしている。

3. アジアへの志向と西洋との接続

村上は滞米経験を契機として「西欧」から距離を置こうとする。村上は新聞のインタビュー記事で次のように述べている。

今いちばん問題になっているのは、国境線が無くなってきていることです。テロリズムという、国境を越えた総合生命体みたいのものが出来てしまっている。これは西欧的なロジックと戦略では解決のつかない問題です。「テロリスト国家」をつぶすんだと言って、それを力をつぶしたところで、テロリストが拡散するだけです。僕はイラク戦争のときにアメリカに住んでいたんですが、とくにメディアの論調の浅さに愕然（がくぜん）としました。「アメリカの正義」の危うさというか。長い目で見て、欧米に今起こっているのは、そのロジックの消滅、拡散、メルトダウンです。それはベルリンの壁が壊れたところから始まっている。⁸

村上は「西欧的なロジックの限界」を指摘し、その要因としてアメリカ滞在中の経験をあげている。

村上は「日本」に回帰することはないし、「西洋」に向かおうとしているわけでもない。村上

⁸ 「村上春樹さん、時代と歴史と物語を語る（上）」（聞き手 共同通信編集委員・小山哲郎）（『中日新聞』2015年4月21日付）

はどこに向かおうとしているのであろうか。村上の方向性を考えるにあたって参考になるのは、例えば次のようなインタビュー記事である。

僕はアメリカの新聞や雑誌に非常に敬意を持っていたが、イラク戦争以降、極端な論調に揺れ動き、あの国のメディアは急速に力を落としている。出版社も元気がない。これからはアメリカとヨーロッパ、東アジア間の差が縮まり、文化的なやりとりは一層さかんになるし、より等価的になると思う。『ノルウェイの森』を今度映画化するのはトラン・アン・ユン監督。ベトナム出身でフランスに拠点を置く彼だからこそ撮れるという面もあるだろう。アジア発信の映画になればと期待する。⁹

村上は、欧米と東アジアの文化的な等価性に言及する。そして村上は、ベトナム出身の監督によって映画化される『ノルウェイの森』が、「アジア発信」になることへ期待を寄せる。この記事から、村上の「アジア」への志向を読み取ることができるであろう。

「アジア」への志向は、ベトナム系フランス人作家であるミン・トラン・ユイとのインタビュー記事にも見出すことができる。

僕らは、ひとつの世界、この世界に生きていますが、しかし、その近辺には別の世界がいくつも存在しているのだと思います。もしも、あなたがほんとうに望むなら、壁を通りぬけて別の世界へと入っていくことができるでしょう。ある意味、現実から自分を解放することは可能なんです。それこそ、僕が自分の本のなかで試みていることです。それはたいへんに東洋的で、アジア的な考え方だと思います。日本や中国では、並行する二つの世界があって、そのあいだにある架け橋が、一方の世界から他方の世界への移動を難しくしすぎないようにしている、と考えられています。西洋ではそんなわけにはいきませんよね。この世界はこの世界、あの世界はあの世界、といった具合になっています。分離は厳格です。壁はあまりにも高すぎ、あまりにもしっかりと立っています。しかしアジア文化はちがうんです。¹⁰（傍点原文）

村上は、「西洋」と「アジア」の間に明確な境界線を引き、「アジア文化」には、「西洋」には見出すことのできない「別の世界」との通路があると考え。そして村上は、ミン・トラン・ユイに「あなたがほんとうに望むなら」「別の世界へと入っていくことができる」と語りかけるが、それはミン・トラン・ユイがアジアを出自とする作家だからであろう。

しかしだからと言って、村上は西洋に対して排他的に振る舞っているわけではない。着目して

⁹ 『読売新聞』、2009年6月18日付、聞き手：尾崎真理子

¹⁰ 『夢を見るために 毎朝僕は目覚めるのです』、文藝春秋、2010年（初出、“Haruki Murakami : écrire, c’est comme rêver éveillé,” *Magazine Littéraire*, N°421, Juin 2003. 翻訳協力・堀千晶）

おきたいのは、トラン・アン・ユンもミン・トラン・ユイも共にベトナムを出自としながら、フランスで創作活動を行っていることである。両者は共に西洋との繋がりを保ちつつ、アジアに向かっている。

そして、この事は『ねじまき鳥クロニクル』執筆時の村上に重ね合わせることができるであろう。日本出身で、アメリカに拠点を置く作家だからこそ書くことのできた物語が『ねじまき鳥クロニクル』である、と。

興味深いのは『ねじまき鳥クロニクル』の装幀である。新潮社で装幀を担当した高橋千裕によれば、『ねじまき鳥クロニクル』の装幀は、バリ島の美術館¹¹で展示されている絵画である。高橋は、装幀が決まる過程について次のように語っている。

高橋 そうですね。春樹さんは絵も本もたくさん見ているし、非常に感覚が鋭い方。それを信じて、春樹さんから抽出したイメージを形にしていくという意識でやっています。それでも行き詰まってしまうことはある。今までで一番大変だったのは『ねじまき鳥クロニクル』。あの本は半年ほどかけて制作しました。

寺島 あのときは村上さんからの“宿題”があったんです。

高橋 難しい“宿題”でしたね。まず、表紙にはこの世にいない鳥の絵を飾りたい。そして、1巻目は緑を基調としてほしい。

寺島 帯はつけないことも大事な方針でした。ですから発売当時は帯を付けていません。そしてもう一つ、いままで見たこともない装幀にしてほしい、というもの。それで半透明の紙をカバーにするという案が生まれました。

高橋 鳥探しも難航しましたね。いくつか提案したのですがしっくりこなくて、煮詰まった私が一旦手を休めようとバリに旅行に行ったんです。そこで訪れた古い美術館で、ある絵の中に鳥を見つけて。これだ！と。¹²

高橋は、村上から出されたイメージをもとに装幀について考え、その結果バリ島の絵画に行き着いた。高橋は難航したと振り返っているが、恐らく、村上の了解が得られなかったのであろう。だが村上は、バリ島の絵画は受け入れた。それは、村上のイメージとバリ絵画が響き合ったこと

¹¹ MUSEUM PURI LUKISAN, UBUD BALI、『ねじまき鳥クロニクル』（新潮社、1994）のカバーに拠る。

¹² 「村上春樹『騎士団長殺し』の装幀が生まれるまで」（『BRUTUS CASA』、2017. 2. 28、アドレス：<https://casabrutus.com/culture/39084/5> 確認 2019/10/17

を意味している。バリ島は、いわゆるバリマジックで知られる、神秘的な場所である。装幀にバリ絵画が用いられたことにより、この物語世界はバリ島の絵画で包まれることになる。

しかし、それだけではない。バリ絵画を覆うのは半透明のカバーであり、そこには「泥棒かささぎ編」という言葉が記されている。「泥棒かささぎ」は、ロッシーニのオペラの題名であり、この物語の冒頭で奏でられる序曲である。物語をバリ絵画で覆う一方で、さらにその表層に西洋文化を配置するという趣向が凝らされているわけである。

物語世界を覆っている装幀やカバーに示唆されているのは、『ねじまき鳥クロニクル』の「日本」は「アジア」に包まれているが、「西洋」とも接続されていることである。言い換えれば、『ねじまき鳥クロニクル』装幀の次元では、日本がアジアに包まれていると同時に、西洋との間にも文化的な紐帯を結んでいることが示されているのである。このような日本とアジア、そして西洋との関係性は物語世界においても表現されている。

4. 間宮中尉の神秘体験

これから『ねじまき鳥クロニクル』について考察していく。物語は、西洋文化圏から始まる。

台所でスパゲッティをゆでているときに、電話がかかってきた。僕はFM放送にあわせてロッシーニの『泥棒かささぎ』の序曲を口笛で吹いていた。それはスパゲッティをゆでるにはまずうってつけの音楽だった。¹³

東京で暮らす「僕」（岡田亨（トオル））が料理しているのはイタリア料理、聞いている音楽は西洋音楽である。西洋文化によって洗練された都市で暮らす人びとの、一般的な光景と言ってよいであろう。しかし物語世界では、「本田さん」「加納マルタ」「加納クレタ」「間宮中尉」が次々に登場することにより、予言や神秘的な体験という非日常的な光景が描き出されていく。

神秘体験は、岡田亨が体験談を聞くという構図で描き出されていく。岡田亨は、「他者」の過去に耳を澄ます。この点について、村上は次のように述べている。

物語の進行の中で岡田トオルがしばしば聞き取る過去からの響きは、主に他者のかかわる過去の響きである。自分自身の過去ではない。極言するなら、彼は他者の過去性の中に否応なく引きずり込まれていくのであり、それがこの『ねじまき鳥クロニクル』という物語の基調をなしている。¹⁴

村上が「過去の響き」「過去性」と表現していることに注意を向けたい。岡田亨が聞き取るのは、

¹³ 「1 火曜日のねじまき鳥、六本の指と四つの乳房について」（『ねじまき鳥クロニクル』第1部）

¹⁴ 「解題」（『村上春樹全作品 1990～2000 ②』講談社、2003年）

「過去」ではなく、他者の「過去」に付随する何かである。岡田亨に過去を語る登場人物は、笠原メイを除き、いずれも神秘的な力と何らかの関わりを持っている。だとすれば、「過去」に付随する何かとは神秘性のことであり、神秘性がこの物語の「基調」の大きな要素になっていると考えてよいのではないだろうか。

神秘性と響き合っているのは、岡田亨だけではない。岡田亨の妻の父親や兄は、占いや予言に強い影響を受けている。妻の父は高級官僚であり、兄は研究者から政治家へと転身しようとしている。彼らは、現実世界では最も合理性を重んじるべき立場にあり、神秘性とはほど遠い存在として考えられる。しかし彼らは、「本田さん」や「加納クレタ」の予言に全幅の信頼を寄せている。

この物語の特徴の一つとして、洗練された都市である東京で、西洋文化を享受している日本人が、神秘性に「引きずり込まれていく」という構図を見出すことのできるのではないだろうか。

神秘性は、第1部の最終章である13章において特異な光景として、間宮中尉の話を通して描き出されることになる。間宮中尉は、浜野と本田という二人の兵隊、そして山本という民間人と共に「小規模な作戦行動」に従事する。山本は、特務機関に所属する高級将校と考えられる。間宮中尉の一行は、満州国から「外蒙古」へと侵入する。しかし外蒙古軍に捕らえられ、見張りに立っていた浜野は殺害されてしまい本田は逃亡する。山本は拷問され、全身の皮を剥ぎ取られて死ぬ。間宮中尉は、砂漠の中の井戸に放り込まれるのだが、そこで神秘的な体験をする。

まず井戸のある場所について確認しておく。

二時間か三時間、彼らは北に進みました。そしてラマ教の石塔のあるところでもとまりました。そのような石塔はオボと呼ばれています。それは道祖神のようなものでもあり、また砂漠の中の貴重な役目も果たしています。そのオボの前で彼らは馬を下り、私を縛っていた紐をほどきました。(略)彼らが私を連れていったところは、地面に掘られた井戸でした。¹⁵

ラマ教というのは、チベット仏教の俗称である。「オボ」は「道祖神のようなもの」とあるように崇拝の対象であり宗教性を帯びたものである。後藤富男によれば、モンゴル族には「オボの崇拝の習俗」があり、「オボ崇敬に相当する宗教的な儀礼は、古く歴史上の匈奴はじめステップの諸民族のあいだにひろく行われ」¹⁶ているとされる。また白莉莉は「オボー」について「シャマニズムに起源を持つと言う観点が普遍的に認められ」¹⁷ているとする。要するに、「オボ」は北アジアに広範囲に見られた原始宗教に繋がるものであり、霊性との接点となっていると考えられる。間宮中尉の放り込まれた井戸が、このような宗教性を帯びた場所であることに着目してお

¹⁵ 「13 間宮中尉の長い話・2」(『ねじまき鳥クロニクル』第1部)

¹⁶ 後藤富男「モンゴル族におけるオボの崇拝」(『民俗学研究』1956年8月)

¹⁷ 「オボと十三塚の比較考察：石推信仰としての類似点から」(『比較民俗学研究』2009年3月)

く。

その井戸の底で間宮中尉は、神秘的な光を浴びる。

それからどれくらい時間が経ったのか、私にはわかりません。しかしある時点で、思いもかけぬことが起こりました。太陽の光がまるで何かの啓示のように、さっと井戸の中に射し込んだのです。その一瞬、私は私のまわりにあるすべてのものを見ることができました。井戸は鮮やかな光で溢れました。それは光の洪水のようでした。私はそのむせかえるような明るさに、息もできないほどでした。暗闇と冷やかさはあつと言う間にどこかに追い払われ、温かい陽光が私の裸の体を優しく包んでくれました。私の痛みさえもが、その太陽の光に祝福されたように思えました。¹⁸

間宮中尉の身体は「太陽の光」に包まれ、「祝福」を感じ取る。「太陽の光」が「何かの啓示のように」とある点を併せて考えると、それは何らかの宗教的な「光」であると考えられる。この光景は再び描き出される。

私はその光の中でぼろぼろと涙を流しました。体じゅうの体液が涙となって、私の目からこぼれ落ちてしまいそうに思えました。私のからだそのものが溶けて液体になってそのままここに流れてしまいそうにさえ思えました。この見事な光の至福の中でなら死んでもいいと思いました。いや、死にたいとさえ私は思いました。そこにあるのは、今何かがここで見事にひとつになったという感じでした。圧倒的なまでの一体感です。そうだ、人生の真の意義とはこの何十秒かだけ続く光の中に存在するのだ、ここで自分はそのまま死んでしまうべきなのだと私は思いました。¹⁹（傍点原文）

間宮中尉は「光」との「一体感」を「至福」の瞬間であると感じ取り、そこに「人生の真の意義」を見出す。しかし「光」は去ってしまい、間宮中尉は「私の恩寵は失われてしまった」と感じる。

「オボ」に着目すれば、間宮中尉の神秘体験は霊的なものへの接近と考えてよいのではないだろうか。しかし間宮中尉から「至福」の感覚は「消え去って」しまい、言わば敗残者としてその後の人生を生きることになる。間宮中尉は次のように語る。

生命の核のようなものをすっかり焼きつくしてしまったような気がするのです。あの光は、私にとってはそれくらいに神秘的なものでした。うまく説明することができないのですが、ありのまま正直に申し上げまして、それ以来私は何を目にしても、何を経験しても、心の底では何も感じなくなってしまったのです。²⁰

¹⁸ 「13 間宮中尉の長い話・2」（『ねじまき鳥クロニクル』第1部）

¹⁹ 「13 間宮中尉の長い話・2」（『ねじまき鳥クロニクル』第1部）

²⁰ 「13 間宮中尉の長い話・2」（『ねじまき鳥クロニクル』第1部）

間宮中尉の言う「神秘的なもの」をどのように捉えることができるのであろうか。「啓示」「恩寵」は超越的な主体によって与えられるものであるが、それが何かは明らかにされていない。したがって「神秘的なもの」の正体については、宗教性を帯びた何物か、という漠然とした理解をするより他ない。

このような間宮中尉の神秘体験は、第2部でも描き出される。間宮中尉は次のように語る。

私はただ光にすっぽりと包まれているのです。でもそこには何かが見えます。一時的な盲目の中で、何かはその形を作ろうとしています。それは何かです。それは生命を持った何かです。光の中に、まるで日蝕の影のように、その何かは黒く浮かび上がろうとします。でも私にはその姿をはっきりと見定めることができません。それは私の方にやってこようとしています。それは私に何か恩寵のようなものを与えようとしているのです。私は震えながらそれを待ちます。でもその何かは、思いなおしたのか、それとも時間が足りなかったのか、結局私のところにはやってこないのです。²¹ (傍点原文)

「何か」から、間宮中尉に「恩寵のようなもの」を受け取ることはできない。間宮中尉は、「その光の中にある何かの姿を見極められない苦しみでした。見るべきものを見ることができない渴き」だけが残されることになる。間宮中尉は、「その姿は私の前から永遠に奪い去られ」たと語る。なぜ「何か」は姿を見せることはあっても、間宮中尉の下に訪れることはないのであろうか。

5. 「参考文献」と物語世界

間宮中尉の神秘体験について考えるために、第1部の巻末にあげられている「参考文献」を参照する。第1部の巻末には以下のような書籍が「参考文献」として示されている。

- 「ノモンハン美談録」 忠霊顕彰會 新京 満州圖書株式會社 昭和 17 (1942) 年
- 「ノモンハン空戦記 ソ連空将の回想」 ア・ベ・ボロジェイキン 林克也・太田多耕 訳 弘文堂 昭和 39 (1964) 年
- 「ノモンハン戦 人間の記録」 御田重宝 現代史出版会 発売徳間書店 昭和 52 (1977) 年
- 「ノモンハン戦記」 小沢親光 新人物往来社 昭和 49 (1974) 年
- 「静かなノモンハン」 伊藤桂一 講談社文庫 昭和 61 (1986) 年
- 「私と満州国」 武藤富男 文藝春秋 昭和 63 (1988) 年
- 「日本軍隊用語集」 寺田近雄 立風書房 平成 4 (1992) 年

²¹ 「4 失われた恩寵、意識の娼婦」(『ねじまき鳥クロニクル』第2部)

「ノモンハン 上下 ―草原の日ソ戦―1939―」アルヴィン・D・クックス 岩崎俊夫・吉本晋一郎訳 秦郁彦監修 朝日新聞社 平成1(1989)年

「満州帝国 I・II・III」児島襄 文藝春秋 文春文庫 昭和58(1983)年

村上はいくつかの文献を参照した上で物語世界を作り上げているのであり、そのことを明らかにしておきたかったという事であろう。

例えば、先に言及した「オボ」については、『ノモンハン 草原の日ソ戦―1939―』(上)に「ハルハ河の満州国側にはオボ、すなわち石塔が十キロないし十五キロおきに見られる」とあり、註記には「オボは境界線としてだけでなく、ラマ教の信仰対象でもあった」と記されている。

しかし、「参考文献」をただ単に小説を書くための資料として捉えるだけでは不十分ではないだろうか。これらの書物はそれぞれ固有の視点からノモンハン事件について語り、それぞれの物語を作り上げている。例えば『ノモンハン美談録』は、文字通りの「美談」録であり、戦死は言わば散華の物語として語られる。『ノモンハン戦記』では、実際にノモンハン事件で戦い重傷を負った元兵士の体験が物語られている。『ノモンハン戦 人間の記録』ではノンフィクションの体裁で語られているが、軍上層部に対する批判意識が底流にある。辞書的に編集されている『日本軍隊用語集』ですら、客観的な記述の体裁を取ってはいるものの批判意識を垣間見ることができる。例えば、「皇軍」の項目では次のように説明されている。

いずれにせよ「天皇の軍隊」というプライドは日本の軍隊のなかだけの主観的な意識であって、外国人にはまったく理解されず、したがって通用もしない。

長い間、中国戦線で戦闘に明け暮れていた元兵士の森金千秋氏は、その著書『日中戦争』の中で「旧日本軍は、皇軍と称していたように天皇の軍隊であった。国民の軍隊ではなかったのである。これほど兵を虐待した軍隊は他にないのではないだろうか」と語っている。

民族的独善は、結局その民族さえも犠牲にしたのである。

この説明が興味深いのは、「皇軍」を「日本の軍隊」の「主観的な意識」であり、「外国人」には理解ができないとすることである。「皇軍」について理解できないと言うのは、現在の大多数の日本人にも当てはまることではないであろうか。この点からすれば、戦後の日本人は、戦前の日本人にとっては「外国人」のような存在であると言えよう。

村上は「日本人性」を「相対化」としたが、それは戦後の日本人から、戦前の「日本人性」を批判的に見直すことではないだろうか。「皇軍」の説明が『ねじまき鳥クロニクル』に直接的な影響を与えている言うことはできないが、遠く響いていると考えることはできる。

いずれにしても「参考文献」は、美談から批判までノモンハン事件をめぐる多様な物語の存在を示唆している。その意味で「参考文献」は、参考資料と言うよりも、ノモンハン事件をめぐる物語群であると言って過言ではないであろう。そして『ねじまき鳥クロニクル』は、そのような

物語群を含みながら、ノモンハン事件について語られた物語として考えることができるであろう。

「参考文献」と物語世界の関係性については、小説が刊行された早い段階で、川村湊によって指摘されている。川村は「村上春樹のノモンハンに関わる文章のリアリティーが、『美談録』や『静かなノモンハン』などの記述に拠っているものであることは明らかだろう」²²と述べる。また柴田勝二は「村上が参照した資料のうち、間宮の語り口を想起させるものは、ノモンハンの戦いに生き残った兵士たちの回想を集めた伊藤桂一『静かなノモンハン』」であるとした上で、物語世界との差異に言及して、「戦争の残酷さというよりも、人間の内にわだかまっている暴力への衝動であり、それが開示される空間として、戦争という国家間の暴力の場が選び取られている」²³とする。これまでの研究によって、伊藤圭一の『静かなノモンハン』が物語世界を考える上で看過できないものであることが確認される。

先行研究の指摘を踏まえた上で、この物語におけるノモンハン事件の意味について、『静かなノモンハン』を中心に間宮中尉の神秘体験について考察を進めて行きたい。『静かなノモンハン』は、ノモンハン事件から生還した元兵士の体験談を基にして書かれている。伊藤は次のように述べている。

「静かなノモンハン」は、たまたま縁あって話をきいた三氏の体験を、私なりの方法で記述することになったが、これはノモンハン事件によって散華された多くの将兵たちの思いを、代弁していることになるのは、もちろんである。記述者としても、胸を痛めつつ、筆を執らねばならなかった。²⁴

『静かなノモンハン』は、伊藤が生還した元兵士から話を聞き記述したものである。凄惨な場面は随所に見られ、戦場がいかに悲惨なものであるかは十分に描き出されている。同時に、戦時における兵士の心性が生々しく露呈している。

「隊長殿、お願いがあります」

と、呼びかけてくる者があります。足をとめると、その部下の兵隊は、

「一人壕ではなく、二人壕にしていただけませんか」

と、申します。「なぜか」と、問い返しますと、

「寂しいのです」

²² 『『ねじまき鳥クロニクル』の分析 現代史としての物語—ノモンハン事変をめぐる—ハルハ河に架かる橋—』、『國文学 解釈と教材の研究』（1995年3月）、所収『村上春樹をどう読むか』（作品社、2006年）

²³ 柴田勝二「偏在する「底」—『ねじまき鳥クロニクル』『アフターダーク』における暴力」（『中上健次と村上春樹 〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』東京外国語大学出版会、2009年）

²⁴ 講談社文藝文庫『静かなノモンハン』（2005年）を参照した。

と、正直に答えてきました。

「一人壕は、死ぬと、一人で靖国神社に行かねばなりません。しかし二人壕だと、二人一緒に死にますので、二人で揃って行けます。死ぬとき、連れがあるのとないのとでは、まるで寂しさが違うのです」²⁵

戦友と共に死ぬことが、兵士の救いとなっている。だとすれば、兵士にとって大切なことは戦友の絆である。そして、その延長には「靖国神社」がある。このような兵士の心性から窺い知ることができるのは、「靖国神社」は兵士たちの絆の要所となっていることである。

その一方で見過ごすことができないのは、兵士の神秘体験が描かれ、そこに重要な位置づけが与えられていることである。『静かなノモンハン』の最後の場面では、戦友の遺体をめぐって次のような場面が描かれている。

何だろう？—と思って、音のするほうをみますと、砂の上に腰を下ろしている私の左の足から、ほんの一メートルほどの先に、背囊が一つ置かれていましたが、その背囊の蓋が、みていると、バタ、バタ、と音をたてて、めくれるのです。あたりは、まったく風はありません。風があっても、少々の風では、革の背囊の蓋はめくれないのです。しかも、私の目の前で、背囊の蓋は、バタ、バタと、恰も私に呼びかけるようにして、めくれつづけています。

とつぜん、私は、電気にうたれたような、衝撃を覚えました。

(平本だ、そうだ平本だ、平本の背囊だ)

と、はじめて気付いたのです。私は、この場所が、平本を仮埋葬した場所であることを、つい、忘れてしまっていたのです。²⁶

無風にもかかわらず、背囊の蓋がめくれて音を出し、それによって戦友の遺体の場所を見つけるという場面である。死者の呼びかけという神秘的な体験が描き出されている。この場面について、伊藤は巻末に付された司馬遼太郎との対談で次のように述べている。

ここに出てくることは、フィクションではないんです。あの部分は、心霊学になってしまうんですが、戦場のああいう極限状態になりますと、そういうものがいくらか入り混ってしまうところがありましてね。神秘的なできごとも多いです。鳥居さんが、非常に深刻なそういう体験をなさった。はっきりいうと、あの部分の効果を出すために、この作品全部を書いたといってもいいくらいなんです。²⁷

²⁵ 「背囊が呼ぶ」(前掲『静かなノモンハン』)

²⁶ 「背囊が呼ぶ」(前掲『静かなノモンハン』)

²⁷ 「背囊が呼ぶ」(前掲『静かなノモンハン』)

伊藤は兵士の神秘体験を事実であると述べ、作品において最も重要なものとして位置づけている。しかし神秘体験は極限状態での出来事に止まることなく、兵士の絆の物語に回収されていくことになる。神秘体験は、次のような元兵士の言葉で締め括られる。

平本の、私へ呼びかけたい一念が、ほかに手段がないので、背囊の蓋をめくって合図としたのです。

そうして、平本に限らない、あの戦場でいのちを終えた多くの将兵たちは、みなたれもが、私たちに向けて、呼びかけていたのです。その呼びかけに答えてやらなければならないと、そのことだけを、いまでも私は、片時も忘れたことはありません。²⁸

神秘体験は、元兵士の戦死者の「呼びかけ」として意味づけられる。詳述する余裕はないが、この場面に限らず、この作品に一貫しているのは戦友たちの強い結びつきである。そのことが、最後の場面で象徴的に描き出されているのである。

先に見たように、兵士たちにとっては、死んで「靖国神社」に英霊として祀られることは疑いの余地のないことである。そうである以上、兵士の神秘体験は、戦友の絆として意味づけられたことにより、「靖国神社」に回収されてしまうことになるであろう。

高橋哲哉『靖国問題』²⁹では「靖国神社が人々に与えたもの」として、次のような指摘をしている。

「お国のために死ぬこと」や「お天子様のために」息子や夫を捧げることを、聖なる行為と信じさせることによって、靖国信仰は当時の日本人の生と死の全体に最終的な意味づけを提供した。人びとの生と死に最終的な意味づけを与えようとするものを「宗教」と呼ぶならば、靖国信仰はまさしくそのような意味での「宗教」であり（略）天皇その人にほかならないとされた国家を神とする宗教であった。天皇その人にほかならない国家を神とする宗教だからこそ、そのために戦死した者が「神」とされたのである。

高橋の指摘に従えば、「靖国神社」は、兵士たちの「死」を宗教的な「聖なる」体験として意味づけていく存在であると理解される。

『静かなノモンハン』における神秘体験の意味を参照すると、『ねじまき鳥クロニクル』における間宮中尉の神秘体験の批評性が明らかになる。間宮中尉の神秘体験は、徹底して個人的な出来事として語られている。間宮中尉の作戦行動は、二人の兵隊と一人の民間人を装う高級将校と共に始まる。だが兵隊の一人は死に、もう一人は逃亡する。そして高級将校は殺害される。この

²⁸ 「背囊が呼ぶ」（前掲『静かなノモンハン』）

²⁹ ちくま新書『靖国問題』、筑摩書房、2005年

ような状況の変化は、間宮中尉が作戦行動を遂行する兵士から孤独な個人へと変容していくことを示唆している。間宮中尉は軍服すら剥ぎ取られ、まる裸にされたまま井戸の底に放り込まれ、孤独な一人の人間として井戸の底で死に瀕することになる。

したがって『静かなノモンハン』における兵士の神秘体験のように、兵士の絆に回収されることはないはずである。だとすれば間宮中尉の神秘体験は、一人の日本人が、オボの崇拝の場所で、神秘的な光を浴びたと言うことになるであろう。そしてオボが北アジアにおけるシャマニズム的な原始宗教と関わりのある場所である以上、間宮中尉の浴びる光は「アジア」的な霊性への接近として捉えることができる。

だが間宮中尉は恩寵の主体に接近することはできても、ついに邂逅を果たすことはできない。その理由については、間宮徳太郎が「間宮中尉」と呼ばれ続けていることに求めることができるのではないだろうか。間宮中尉は終に兵士から個人に戻るができなかったのである。兵士の神秘体験は靖国神社に回収され、聖性を付与されてしまう。だからこそ間宮中尉には、アジア的な霊性の主体を「見定める」ことはできなかった。

『ねじまき鳥クロニクル』は、『静かなノモンハン』を含みながら兵士の神秘体験を個人的な体験へと変容させようとする。しかし間宮徳太郎は終に個人に戻ることができず、自らの無残な戦後を岡田亮に語り伝える他はない。

6. 石原莞爾の思想と宗教性

村上は、『ねじまき鳥クロニクル』第1部、第2部を刊行した後に、第3部の執筆に取りかかる。なぜなら、村上には物語世界が完結したという確信を得ることができなかったからである。村上は「『ねじまき鳥クロニクル』という小説は完成されたのではなく、ただ単にひとつの段階を終了しただけなのだ。言い換えれば、僕の中ではまだその物語が継続しているのだ」³⁰と回想している。続けて、村上は次のように述べている。

しかしそこにはやはり解決されていないいくつかの謎がある。なぜ妻のクミコは突然家を出ていったのか、義兄の綿谷ノボルはその失踪にどこまで関与しているのか（確実に関与しているはずだ）、そして主人公はどうやって彼と対決していくのか？第3部ではそのような事実があるところまで解明されなくてはならないはずだった。そして第3部のテーマは、簡単に言ってしまうと、「闘争」と「救済」にならざるを得なかった。それは僕がおそらくは、それまでの作品の中では正面切って書いたことの無いものごとだった。³¹

³⁰ 「解題『ねじまき鳥クロニクル』2」、『村上春樹全作品 1990～2000 ⑤』講談社、2003年

³¹ 前掲「解題『ねじまき鳥クロニクル』2」

村上は、第3部を書き始めるにあたって岡田亨と綿谷ノボルの「闘争」を予測していた。村上は、岡田亨と綿谷ノボルの対決を果たされなければこの物語は終わらないと考えている。

岡田亨は、井戸の底深くに降り壁を抜けることで、綿谷ノボルに致命的な傷を与えることができる。岡田亮の井戸の底での神秘体験は、間宮中尉の神秘体験との深い繋がりを示唆している。間宮中尉の話を聞くことがなければ、岡田亨は神秘的な力を手に入れることはできなかったであろう。一人の平凡な日本の若者が、元兵士からノモンハンの記憶を聞くことで神秘的な力を獲得していったのである。

村上は岡田亨について、「間宮中尉がなしえなかったことを、彼は果たす」と語っている。この村上の発言に従えば、岡田亨は間宮中尉の記憶を継承して綿谷ノボルに立ち向かっていることになる。

「間宮中尉がなしえなかったこと」とは、ソ連の収容所で「鉄の支配体制」を作り上げた「皮剥ぎボリス」を殺すことである。ボリスは収容所で全体主義社会を作り上げていくのであり、第3部で鮮明になったのは、間宮中尉の闘争はファシズムとの対決であったことである。間宮中尉は「私はこの世界にボリスという人間の存在を許すわけにはいかなかった」「この男を殺すことによって、私の生きている意味も出てくるのだ」と語る。しかし間宮中尉の銃が放った弾丸は、「完璧な一発」であったにも関わらず逸れてしまう。ボリスは間宮中尉に次のように語る。

君の射撃がまずかったわけではない。ただ単に君には私を殺すことはできないんだ。君にはそんな資格はないのだよ。³²

ボリスの言うように間宮中尉には「資格」が無いのだとすれば、それは兵士であることから自由ではないからであろう。

先に考察したように、間宮中尉は神秘体験から何らかの啓示を得るが、超越的な主体との邂逅を果たすことはできない。なぜなら間宮中尉は兵士であり、アジア的な霊性との邂逅をはたそうとしても、兵士の心性が障害となってしまうからである。ボリスとの対決においても同様のことが言い得るのではないだろうか。

間宮中尉に代わって、岡田亨が立ち向かうのは綿谷ノボルである。綿谷ノボルが体現しているのは戦前から戦後へと引き継がれている「日本人性」ではないだろうか。第3部では、綿谷ノボルと石原莞爾の親和性が示唆される。石原は満州国の建国に深く関与した軍人である。綿谷ノボルは政治家であった伯父から「政治的地盤」を引き継ぐが、伯父は「陸軍大学」出身の軍人であり石原と親交があった。伯父は石原莞爾と「奉天」で会い「差し向かいで一夜飲み明かす」が、「石原の明晰な論理と世界観、そしてカリスマ的な人間性にすっかり心酔して帰国し、二人の親交は伯父が日本に戻ってから」続くことになる。伯父の「事務所の壁には石原莞爾の書が掲げ

³² 「34 ほかの人々に/想像させる仕事/(皮剥ぎボリスの話のつづき)」(『ねじ巻き鳥クロニクル』第3部)

られて」いる³³。石原莞爾の思想は、戦後の日本にも引き継がれていることが暗示されている。それを引き継ごうとしているのが、綿谷ノボルである。

伯父と石原莞爾との関わりについて説明するくだりでは、『世界最終戦争論』が示唆されている。

現在の時点で対西欧戦争（彼がいうところの「最終戦争」）を遂行する能力のある国はアジアには日本ただひとつしかなく、他の諸国は彼らが西欧諸国から解放されるために日本に協力する義務がある、と彼は信じていた。（傍点原文）

「最終戦争」と言うのは、石原莞爾の『世界最終戦争論』のことである。この説明は概説的で、石原の思想が明らかになっているとは言い難い。だが『世界最終戦争論』で語られている石原の思想は、『ねじ巻き鳥クロニクル』を考える上で極めて示唆的である。

『世界最終戦争論』³⁴で石原は、「天皇が世界の天皇で在らせらるべきものか、アメリカの大統領が世界を統制すべきものかという人類の最も重大な運命が決定するであろうと思うのであり」、それは「東洋の王道と西洋の覇道の、いずれが世界統一の指導原理たるべきか」を決定することであるとする。そして石原莞爾は「天皇が、間もなく東亜連盟の盟主、次いで世界の天皇と仰がれることは、われわれの堅い信仰であります」と述べる。石原の言う「最終戦争」とは「天皇」による「世界統一」のことであり、「西洋」からのアジアの解放は、「天皇」の下にアジア諸国が服することを意味する。「協力する」という言葉に傍点が付されているが、皮肉と取るべきであろう。このような石原の天皇観が満州国の建国の背景にはある。³⁵

それに加えて看過できないのは、このような石原の思想には宗教性が強く窺われることである。『最終戦争論』には次のような一節がある。

それで明治時代になりまして日本の国体が世界的意義を持ちだした時に昨年なくなられた田中智学先生が生まれて来まして、日蓮聖人の宗教の組織を完成し、特に本門戒壇論、即ち日本国体論を明らかにしたのであります。³⁶

大谷栄一によれば、石原は「智学の主宰する国柱会の信行員（会員）であり、熱心な日蓮主義者」³⁷であった。石原の満州国建国と宗教性の関わりについて、山室信一は次のように述べている。

³³ 松枝誠「『ねじ巻き鳥クロニクル』における「忘却の穴」をめぐって」（『立命館文学』、2004年3月）では、石原莞爾の「満州問題私見」に着目して考察を行っている。

³⁴ 『世界最終戦争論』、立命館出版部、1940年

³⁵ 石原莞爾と満州国の関係性については、主に山室信一『キメラ 満州国の肖像 [増補版]』（中公新書、2004年）を参照した。

³⁶ 国立国会図書館デジタルライブラリーを参照した。引用に際して、旧字体は新字体に改めた。アドレス：<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1438614>、2020/01/22 確認

³⁷ 『日蓮主義とはなんだったのか 近代日本の思想水脈』、講談社、2019年

そして、この最終戦争こそ、日蓮が世界統一を実現するためにはまず「前代未聞の大闘争、一閻浮提（人間界）に起るべし」と喝破したところの未曾有の大戦争をさすはずであり、日米決戦がこれに他ならないとみた。これが石原の世界最終戦争論であった。

『ねじまき鳥クロニクル』第3部において石原の『世界最終戦論』が引用されたことは、この物語が石原の思想における宗教性を射程に収めていることを証し立てている。

岡田亨は、石原の思想を引き継ごうとする綿谷ノボルに致命的な傷を与える。それが可能となったのは、間宮中尉から岡田亨が神秘的な力を引き継いだからである。現代の東京で西洋文化を享受している岡田亨は、間宮中尉の話に含まれる「靖国神社」との関わりは受け入れず、神秘的な力だけを手に入れたのではないだろうか。言い換えれば、岡田亨によって戦前の神秘体験は西洋文化によって濾過され、言わば純粋なシャーマニズム的な力が岡田亨に付与されたのである。その神秘的な力こそが、天皇制ファシズムを打ち倒す可能性を秘めているのだ。

『ねじまき鳥クロニクル』の冒頭では、高級官僚の父親は神秘的な力には抗えない事が描かれている。綿谷ノボルも同様である。西洋文化圏と深く繋がっている現代日本に、神秘主義が伏在していることの問題がこの物語の主題の一つであると考えることができる。

戦前の日本人にとって天皇制ファシズムは疑いを得ないものであったが、戦後の日本人の大多数にとってそれは理解不能なことである。だが神秘主義が政治性を帯びたとき、現代の「日本人性」が戦前の「日本人性」に回帰することはあり得ないことではないであろう。しかしその一方で、西洋的な合理主義によって神秘主義を否定することにどれほどの効果を期待できるであろうか。合理主義が力を持つのであれば、現代日本に神秘主義が伏在することはないはずである。

村上は米国滞在中に湾岸戦争に直面して、西洋的な「ロジック」の限界を目の当たりにした。その一方で、村上は日本社会の「偽善性」にも向き合うことになる。村上の創作意識は「日本人性」の「相対化」へと向かう。『ねじまき鳥クロニクル』では、現代日本に神秘主義が伏在し、戦前「回帰」への危険性を秘めた「日本人性」の存在が明らかされている。物語世界では、伏在する神秘主義を明らかにしつつ、西洋文化と接続することで戦前への回帰を回避し、同時にアジアを起源とする神秘的な力に接近する。

『ねじまき鳥クロニクル』の物語世界が切り拓こうとしているのは、西洋と接続しつつ、アジア的な神秘主義へと向かうことではないであろうか。この物語は我々に、戦前の日本回帰に抗うことを促し、アジアの霊性へと向かうオルタナティブな「日本人性」への想像力を喚起していると考ええる。